

歴史のおすすめ本

高草木 邦人 専任講師
(歴史学)

(1) フランス革命を生きた「テロリスト」―ルカルパンティエの生涯 遅塚忠躬著

NHK 出版 2011 年

本書は、日本におけるフランス革命史の大家である遅塚忠躬の遺作です。フランス革命といえば、ルイ 16 世、マリー=アントワネット、ロベスピエール、ダントンなど个性的で、また小説や映画などで題材にされるような人物が登場します。しかし、本書の主人公はルカルパンティエという、日本ではほとんど馴染みの薄い革命家です。

農民の子として生まれたルカルパンティエは革命前には下級役人でしたが、革命が始まると、民衆の側に立つ政治家になっていきます。国民公会の議員に当選したあと、彼はロベスピエールと同じ山岳派に属し、ルイ 16 世の処遇を決める裁判で死刑に賛成票を投じました。山岳派による独裁が始まると、ルカルパンティエは革命を防衛するために、故郷のマンシュ県やその近隣に派遣されました。彼は同地域で王党派の反乱軍を撃退したり、革命に反対する容疑者を逮捕し、パリの革命裁判所へと送ったのです。反革命勢力への苛烈な弾圧措置から、ルカルパンティエは「マンシュの殺し屋」というあだ名がつけられるのです。

ルカルパンティエは、ロベスピエールが失脚した際に一時投獄され、また国民公会の解散後には故郷に隠遁しますが、彼の人生はこれで終わりませんでした。恐怖政治に対する恨みは、王党派の記憶に深く根ざしていたのです。そのため、ナポレオン帝政の崩壊後、王政復古がなされると、王党派は、国王の処刑に賛成した議員を国王弑逆者として、彼らに対する弾圧を始めます。ルカルパンティエも国外追放の刑に処され、密かに故郷に帰国するものの、最後には逮捕され、モン・サン・ミシエルの牢獄で獄死します。

このように、本書では、ルカルパンティエの生涯を見つめながら、革命前夜から王政復古期までの革命家の生き様が描かれています。ロベスピエールやダントンなどフランス革命を彩る革命家は革命の最中に非業の死を遂げますが、ルカルパンティエは革命に対する反動の時代まで生き残り、最後の国王弑逆者として 70 歳の生涯を終えるのです。このようなルカルパンティエという、世界史の教科書には出てこない革命家の人生を知ること、フランス革命がなし得たこと、そしてその記憶について深く考えることができるのです。

(2) 姦通裁判—18世紀トランシルヴァニアの村の世界— 秋山晋吾著

星海社 2018年

18世紀の東欧のある村で行われた姦通をめぐる裁判が、本書の題材となっています。姦通を犯したのは、村の領主の妻。浮気相手は領主の親戚。浮気現場に踏み込みながらも、逆に反撃をうける夫。浮気を目撃者でもあり、共犯者でもある村の住民たち。夫婦と間男の間の金銭トラブル。このように書くと、ワイドショー的なものを期待される方もいるかもしれませんが、本書はそうではありません。むしろ、姦通をめぐるドロドロした展開にはあまり深く立ち入っていません。著者は『姦通裁判』という刺激的なタイトルを付けながらも、その目指すところは、歴史学という学問を良く知ってもらうために書かれた社会史入門・史料学入門なのです。

さて、歴史学では、過去の人々の日常を研究する分野を「社会史」と呼びます。著者はこの社会史の手法で本書を描いています。ですから、本書の登場人物たちは、教科書に出てくる有名人ではなく、名もなき人々なのです。彼らの裁判証言を材料に、貴族がどのような暮らしをしていたのか、貴族や農民が何時に何度食事をとっていたのか、どのような住居に住んでいたのか、どのような恋愛観をもっていたのか、などなど、当事者たちの人間関係、さらに村の住民たちの心性や生活様式などを明らかにしていくのです。

そして、本書の特徴をもう一つあげるならば、史料を「読み解く過程」に力点がおかれていることです。史料とは、歴史学において事実を確定する証拠であり、基本的には研究対象と同時代に書かれた文字資料のことを指します。本書では、村の住民たちの裁判証言が史料として主に使われていますが、証言にはどのような性質や欠点があるのか、その欠点をどのような種類の史料で補うべきか、歴史的背景においてこれらの証言をどのように解釈すべきか、そもそも証言で語られなかったことをどのように理解すべきかなどなど。まさに、歴史家がどのようなことを考えながら研究を行っているのかがわかるようになっているのです。なお、最後には、意外なおチがまっています。おチについては、ぜひ本書を手にとってご自身で確認してみてください。